

(4) インタビュー (その4)

『人間の生物学』について、太田次郎教授に聞く

<日 時> 昭和59年8月17日 (金)

午後 2 時 ~ 4 時

<場 所> お茶の水女子大学

<聞き手> 若 松 茂

(若 松) 今年の「番組制作改善研究」プロジェクトは、一口に申し上げまして、一般受講生の方々の中から50人程度ずつの特別モニターをお願いし、その方々にこちらから15回全番組にわたって、毎回 Questionnaire をお送りし、回答していただくもので、このような刺激が、遠隔学習の受講生にどのような学習効果を与えることができるかを、研究しようとするものです。研究の進め方等につきましては、すでに寺脇先生からもご説明がございましたので、本日は省略させていただき、早速本論に入ることに致します。「人間の生物学」の番組内容について少しお話をお聞かせ下さい。

さて、この番組を拝見致しますと、映像が大変多いため、とても興味深く、また理解しやすく作られておりますが、先生の大学での講義がもともとそうで、そのまま放送番組に再編成されたのでしょうか、あるいは、放送大学用に特別に工夫され、企画されたものでしょうか。

(太 田) 全体としては、お茶の水女子大学の一般教育の「生物学」での講義の経験を多く取り入れております。ただ文科系の一般教育と比べて、放送大学の講座としまして、やや15回に分けて堅くした点がございます。一つだけとくに考慮しておりますのは、高等学校で行なっております「生物」の内容が、現在と、5年前、10年前とは全然違うわけです。つまり5年前に

大学へ入った人は、現在の「生物」の内容では、ほとんど知らない事柄があるという点は、或程度考慮致しました。ですから現在だったら高校でやっている内容も、いくらか入っております。

(若 松) 学習を進める上で、是非一つおうかがいしたいのですが、一寸考えまして、生物学では分類などの細部を記憶するのに相当の努力を必要としますね。しかし先生は印刷教材の「まえがき」で、「個々の事項を覚えることよりも、自ら問題点を探し、その答えとなる自身の考え方を見い出していくことが望ましいと思われる…」と書いていらっしゃいます。

(太 田) その通りです。大学の一般教育の学問というものは、非常に細かいことを覚えるよりは、もっと本質的なこと、例えば「人間の生物学」では、生物界において人間がどんな特長を持つか、ということを理解させようとしているわけですね。そういう点に興味と関心を持ってくればよいので、個々の、例えば「人体の成り立ち」がどういう風に細かくなっているとか、或は「人が生物界に占める位置」の時に、分類表を覚えるとか、そういうことを要求しているのではない、ということなのです。つまり人間というのは、どうして霊長類というのに、生物の分類表の中でこんな位置にあるのだろうか。普通だったらもっと高等だと思っているのに、実は分類表を見ますと、余り高等でない所においてある。そういう意味がわかっていただければいいのです。細かいことを覚えるよりは、大づかみに、人間の生物としての特長がどんな所にあるのか、或は、生物一般に成り立つ規則性が、人間にどの程度あてはまるのか、そういうようなことが、わかっていただければいいと思っているわけです。

(若 松) よくわかりました。

(太 田) この辺にもう一つ、生物学の特長がございましてね。物理や化学

ですと、或程度体系的に組み立てないといけない点がございますね。それに対して、生物は必ずしも組み立てられている学問ではありませんし、「人間の生物学」では、むしろ或意味では、自分自身に直接結びつけて考えてくれることを望んでいるわけです。

(若 松) ところで、今回お作りいただいた Questionnaire は、受講生に一つの学習の刺激を与えることが目的で、テレビを視聴してさえおきますと回答できる程度の内容をお願い申し上げたのですが、假りにもし単位を与えるということになりました場合でも、同じ程度の理解ができればよろしいのですか。それとも単位の場合は別になりますでしょうか。

(太 田) 単位の場合にはこれよりもう少し深い所まで、もっと精細に…。今度の場合は何ととっても、1つの設問がほとんど1行ですから、放送を見たかどうかを重視しているわけです。単位を与えるかどうかにつきましては、もう少し精細な問題を作って考えていきたいと思います。

(若 松) その場合でも、細かい分類表などを暗記したりする必要はない、と考えてよろしいのですか。

(太 田) 覚えたりする必要は全くありません。また実際覚えている人はいないでしょう。ただテキストには書いておきませんと、テキストにならないですからね。そういう表などもあります。

(若 松) それをうかがって一寸安心しました。それから、この番組は、人文系の一般教育の学生にきかせることをお考えなのですが、かりに自然科学を専攻する学生を対象と致しますと、学習の仕方や到達水準も変わって参りますでしょうかね。

(太 田) 自然科学系に進む場合の基礎コースがございますね。そこで基礎生物学などはおやりいただけると考えて、自然科学系の方がこの番組なり科

目をとっていただく場合には、やはり考え方を重視してほしいと思います。自然科学系だったら、もう少し細かい所もやらなければなりません、それは基礎生物学にゆずりたいと思います。

(若 松) ここで話題を変えさせていただきますが、冒頭で申し上げましたように、この番組は、映像資料や視聴覚資料が大変多く、すぐれているように思われますが、ディレクターとどのような話し合いをされたのでしょうか。話し合いはすべてうまくいったのですか。さらに何か心残りの点はございませんか。

(太 田) 私は、この番組はディレクターに非常に恵まれたと思います。大変若いディレクターだったのですが、この番組について、彼は本当に熱心によくやったと思います。もちろん、やはり時間的な制約があることと、それから生物は、材料を特定の研究室に頼らなければならないことが多いのですが、先方が急病になったりして、取材ができなかったこともありました。しかし彼はベストを盡したと思います。

もう一つ、私はテレビの番組というものは、講師だけでできるものではなく、ディレクターとの共同作品であると、たえず思っております。そういう意味で、私はディレクターに恵まれたと思います。

具体的な例を上げますと、例えば、人の脳とイルカの脳を比較して、イルカの脳の方がしわが多いというようなことは、口で言えば簡単なんです、映像の方が遙かに説得力があります。ところでイルカの脳なんか、なかなか手にはいらないわけですね。ほとんどあきらめておりましたが、それを彼がいろいろ調べて、こういう所にあるだろうと、私がサジェスションはしましたが、実際にそれを撮りに行って、とうとうイルカの脳の映像を持って来ましたね。そういう点で、非常に彼は努力をしたと思います。

しかもこの番組では、私は番組に使う材料を、ここはスライド、ここは絵、ここはフィルムというように、15回分全部の絵コンテを一番はじめに彼に渡したのです。そして検討して貰いました。これはロケをやった方がよいのかどうか、…など。それに対して、非常に精細に彼は検討したんですね。

(若 松) 講師とディレクターとの協力関係が大切なんですね。

(太 田) 原則として、1回の収録で2本ずつ撮りましたけれども、相当何回も打合わせしましたが、意見のくい違いはなかったですね。私がディレクターに云いますと、彼自身もそう思っていて、まあ、彼がわからない番組は、おそらく受講生にもわからないだろうと私は思います。

(若 松) その通りですね。

(太 田) しかもディレクターは、上智大学を出た物理屋さんなんです。大学の理工系の物理を出たディレクターなら、彼がわからないことを私が放送したってわからないだろうと思いましたから、率直にここはこうした方がよいだろうと彼が云えば、また私もあそこはこうしてくれといいましたが、意見のくい違いは一度もありませんでした。

ただ、双方とも残念だと思う番組が何本かあります。それは努力はしたけれども、取材先がどうしてもうまくいかなかった。例えば「バイオリズム」では、取材先はうまく見つかったんですが、たまたま取材先の先生が病気になってしまった。そのために具体的な絵が撮れなかった、というような残念な例が幾つかあります。しかしこれは止むを得なかったと思います。

(若 松) 先程の「絵コンテ」について、もう少しお話を聞かせて下さい。

(太 田) 絵コンテと申し上げましたが、番組1本1本につきまして、自分としてはこういうものを使いたいと、15回分の映像資料を、全部はじめに

ディレクターに渡したんです。それはどちらかといいますと、番組の内容を、映像資料でつづったようなものですね。私が「絵」というのを、それは「フィルム」の方がよいだろうというような、そういう打合わせはディレクターと随分致しましたけれども。大切なことは、とにかく先ず映像資料を先に渡したということです。それはテレビをつくるのに非常に大事だと思っています。

(若 松) なにか心残りの点はございませんか。

(太 田) やはり時間がないことですね。45分の番組を15本、あれだけの短い時間で作ろうというのには、時間的な無理があったと思います。1年位かけなければ、良いものができないでしょうね。それに生物にはどうしても季節性がありますしね。ところが、実際に取材をはじめるのは3月の末か4月で、撮り終りが8月ですからね。せめてこの倍位あれば、さらに資料を充実できるだろうと思います。おそらくディレクターも同じことを考えているのではないのでしょうか。

私は、テレビは映像がよくなければ駄目だという考え方はずっと変わらないんですが、とくに今回の生物はそうじゃないでしょうか。理屈でどんなに云っても、どんな絵を使っても、物が出てきたらそれでお終い、ということがあるわけですね。その点では、ディレクターは十分努力してくれたと私は思います。2人とも、もっと時間があればなあ、とは思いましたが。

(若松) 本日はお忙しいところを、貴重なお話をお聞かせていただきまして、有難うございました。なお、このアンケート調査の結果集計は、1月中に終わりますので、その後、研究会を作って打合せしたいと考えております。

(以上)